©琉球新報　2016年05月10日　朝刊28面　記事数：1/1　<1/1枚>
希望この手に　沖縄の貧困・子どものいま＝第３部（８）　県外から引き揚げ（上）　母子３人かすかな光

希望この手に
沖縄の貧困・子どものいま

第３部 ⑧

県外から引き揚げ ㊤

母子3人 かすかな光

失職、病気、不登校

買い物客でにぎわう週末の夜、本島南部のスーパーで食材を買い込む母親と高校生の息子2人の姿があった。

「夕飯は豚肉を使う？」と40代の母親が聞くと、「それなら量の多い冷凍物がいいね」と息子が答える。食料品が詰まった買い物袋を息子たちが肩から提げる。母親と連れ立って歩く姿は仲のいい親子の風景だ。現在、穏やかな毎日を送っている母子は3年前、出口の見えない真っ暗闇にいるような日々を送っていた。

大型スーパーで夕食の献立を考えながら、食料品を品定めする母親と高校生の息子2人＝3月上旬、沖縄本島南部

2013年春、母親と当時高校1年生の長男、中学2年生の次男は、県外から故郷の沖縄に引き揚げてきた。きっかけは母親が勤めていた会社の倒産だった。1～2カ月以内に社宅からの退居を迫られ、途方に暮れた。母親は転職を考えたが体調が悪かった。疲労感が取れず、数十㍍歩くとよろけてしまう。息子たちが幼少時代に離婚し、1人で家計を背負う日々。数年前から体調が悪いと感じていたが、受診する余裕がない。転職どころではなかった。

「沖縄に戻りたい」。母親は帰郷を決意した。長男は諦めた様子で従ったが、「友達と離れるのが寂しいからイヤだ」と次男は拒んだ。母親は次男を説得する形で引っ越し、糸満市の実家に身を寄せた。長男と次男が沖縄に来たのは初めて。顔見知りのいない学校になじめず、2人ともしばらくして学校に通えなくなった。母親は働けず、実家も困窮して頼れない。先行きが見通せなくなった。

◇　◇

「県外から転校してきて不登校になっている生徒がいるんですが、家庭の様子も気になります」。同年5月、糸満市内の中学校から市児童家庭課に相談が寄せられた。次男の学校からだった。次男は不登校になる前の1～2カ月、県外の中学校の制服で登校していた。学校から家計の厳しさが見えていた。

市の家庭児童相談員が関わり、訪問を始めた。次男の担任も熱心に登校を促した。同年8月、学校や行政、市内の「子育て応援隊NPOいっぽ」が会議を持ち、母子への支援策を話し合った。母親には相談に加え、体調を見ながらの就労支援を、息子たちは生活困窮世帯を対象にした「無料塾」につなげることになった。

「このままではいけない。働かなければ」。母親は関係機関が会議を持つ以前、重い体を押してハローワークを訪れ、母親対象の「就労支援事業」に申し込んでいた。利用者は「いっぽ」と契約を結んで接客マナーなどを学び、その後、協力事業所で実務経験を積む。本格的な就労に向けた訓練のような位置付けだ。わずかだが手当もあった。

この事業を受託している「いっぽ」は、個々のニーズに応じて相談や育児の手助けをする団体だ。既存制度では手の届かない支援をする点が特徴。当時は就労支援も手掛けていた。運営費は糸満市の一括交付金を活用し、困窮世帯からは利用料を取らない。

「いっぽ」が母親の体調面を考慮し、受け入れてくれる協力事業所を探した。

母親は働く意欲を持っていたが、研修では体調不良が壁になった。沖縄に戻ってきて受診し、内科系疾患が判明、薬を服用していたが、疲れやすさは改善していなかった。休むたびに申し訳ない気持ちになった。

「本当に働けるのだろうか。子どもたちは不登校だし、これからどうすれば…」。生活も子育ても見通しが立たなかった。

（子どもの貧困取材班）

（随時掲載）